

「療養所も人間の生きる社会」

—— 滝田十和男さんのライフヒストリー(1) ——

‘A sanatorium is also a society for human beings’:
The life history of Towao Takita (1)

田 原 範 子
Tahara, Noriko

要旨

国立ハンセン病療養所「松丘保養園」に暮らす滝田十和男さんのライフヒストリーである。滝田十和男さんは、1925（大正14）年、福島県で生まれた。10歳の頃にハンセン病を発症し、1937（昭和12）年9月21日、12歳の時、同じくハンセン病を発症した父親と一緒に警察に付き添われて強制的に北部保養院に入所した。その後、療養所内の小学校を卒業し、患者の介護や療養所内のさまざまな仕事に従事した。療養所を飛び出し外で行商をしたり、精密機械工組み立ての仕事をしたりした後、手足の麻痺が進んだこともあり、東北新生園へと再入所し、戦争中の厳しい時を生き抜き、知り合いを頼って再び松丘保養園に戻った。若い頃に「生きた証として形に遺せるものは短歌くらいしかない」と始めた短歌は、その才能を認められて、北部保養院で初めて1956年に歌集を出版することになった。歌人であり、俳人でもあった。松丘ではプロミン獲得運動の委員、盲人会の書記、カトリック教会信徒会の世話役なども務めた。

滝田さんは私たちの来訪を快く受け入れ、体調を気にする看護師や職員の心配をよそに、自身の経験や療養所のできごとを語った。その記憶の鮮明さ、語る言葉の芳醇なことに私たち聞き手は驚いた。聞き取り時間は、2015年9月2日に1時間30分、9月3日に52分であった。聞き手は、平田勝政¹⁾、和田謙一郎²⁾、田原範子³⁾である。聞き取り時点で滝田十和男さんは90歳であった。その後、2016年2月2日に1時間10分、2月3日に4時間15分の聞き取りを行った。聞き手は平田勝政、田原範子であり、いずれも病棟の待合室で行った。滝田さんの語りからは常に、今、生きていることへの感謝、人間が生きることへの敬意が感じられた。それは、「療養所にて、ほんとにかわいそうな人生送ったっていう風に思われるかもしれないけども、療養所は療養所なりに、やっぱり人間の生きる社会ですから、生きた社会ですから、それなりにね。やっぱり人間として生かしてもらってありがたいなー」という言葉に凝縮されている。聞き取りはICレコーダーで録音し、後日、松下かおり（四天王寺大学卒業生）が音声を文字データとし、田原が最終チェックを行った。

滝田十和男さんは2016年8月17日、91歳で永眠された。松丘保養園の川西園長によれば、8月19日に園内の松丘カトリック教会で告別ミサが執り行われた。福島から数名の親族が来て、交流のあった人びとや入所者、職員が多数参列して滝田さんに相応しいとてもよい告別式だったという。2016年2月2日、平田と田原は、納骨堂のなかの滝田さんの骨壺を拝むことができた。本稿では、2015年9月の聞き取り調査にもとづいてライフヒストリーを記す⁴⁾。

松丘保養園の最古参

私、滝田十和男と言いまして、ここに入院してから78年くらいになります。今年〔2015年〕、90歳になります。おかげさまで、みなさんに支えていただいて、90歳を迎えておりますけれども、年寄りなもんですから耳が遠くなりましてね。私がいつの間にか、松丘保養園の骨董品になってしまったんですよ。一番古い患者なんですね。

〔松丘保養園は〕一番北のはずれていうことでね、県からあまり重宝されることもなく、密かに生きていたような時代が続いたもんですから、まだこうして近代日本に生きてます。療養所でお世話になってまだまだ生きるてるんですから、申し訳ないぐらい長生きさせてもらってます。

私あんまり人前で話したことないんですよ。目がね、顔にも麻痺が、糖尿病での顔面麻痺も、進んでしまったもんですから、目がこう、まぶたが動かないもんですから、目が乾いてね痛いんです、すごくね。そういうような状態なもんですから、目が乾くとね、大変なんですけど、今日はすごくあの、調子が良いもんですから。

警察による強制収容

12歳のときにね、昭和12年のころに入院したもんですから、ちょうど日支事変がはじまったばかりでね。日支事変が昭和12年の7月に盧溝橋で始まったんですけど、その9月に、福島からね、強制収容で、収容されてきたんですけどね。

私が発病した時代はね、厚生省ってものがなかったんです。ほんで保健所もなかったんで保健所は戦後になってからね。内務省の管轄で、ハンセン氏病、らい病の関係は、警察が司っていたんですよ。ですから、村の医者が私が発病したってことが、診察してわかったので、そで警察に届けるわけですよ。そういう義務があったんですよ、昔はね。警察の方から申告する義務があって、で警察では、そういう患者を、療養所に送るための業務があったので、義務化されていたので。病人が出ると、もう有無を言わずもう、療養所に送りこむことだけを一所懸命考えてたからね。

私たちの村は郡山市からずっと離れ、20キロも山奥の東の山村なんですけどもね、村の駐在巡査がね、もう毎日のようにもう「療養所に入れ療養所に入れ」って来るんですよ。今でも忘れませんが、駐在所の巡査がクマガイ巡査って言ってね、村中を、あの家は患者のうちだから、あまり付き合いをしないようにって、圧迫、圧力かけるわけですよ。

私は父親も病気でしたから。父親の一番末の弟も、昭和7年にここに入院して半年ほどで亡くなってるんですよ。昭和10年ごろ、私が発病したんですけど、けどもその前には父親が、2、3年おって、発病していたもんですから、親子で患者が出たわけですね。ほなもんですからもう、あの家に、近づくとうつるからってというようなことがね。村中の子どもたちが。村の駐在巡査がふれて歩くわけですよ。あの手この手を使ってね、私のうちの親類に回って、青森に行くようにすすめてくれとかね。いや私の父親も、だんだん結節型で顔にも出て、手

足も結節が出てくるような状態だって醜くなってきたもんですから。駐在としては身の課題として、1日も早く療養所に入れたいっていうので。当時は東北新生園がなかったんです。私なんかもまた発病する前から父親が病気だっていうので、すごく村の中でも、迫害されたでね、いじめられたりして、たくさん、被害被ってきたんですけども、また自分が発病したことによって、学校にも行けなくなってね。うちで、うちの子守を弟の子守なんかをしているうちにね、2年が経ったときに、やっとあの療養所に空きができたっていうので、父親と二人で、福島から。昔、お召し列車って、よく患者たちは言いますけれども、患者だけを乗せる、貸し切り列車でね。

お召し列車に乘せられて

村の駐在巡查じゃない、いわゆる本署の巡查部長の方が、付き添いしてくれて、青森までたどり着いてきたんです。1日でね。昔は、青森市じゃなかったんです、青森県の東津軽郡新城村っていう村だったんです。松のあいだをね、荷馬車、とか客馬車が走ってるだけでね、自動車なんて車なんてめったに走らなかったんですよ。青森の駅から客馬車に、乗せられて来たのを、今ではうそのような話ですけども。そういう時代でした、まだね。

うち夜中に出てね。うちの兄貴が東京で旋盤工していたのが17、8歳のときで、兄貴を呼び寄せて、それから分家したうちの伯父と二人で、リヤカーに引かしてね。うち、夜10時ごろ出て、20キロぐらいありますから、朝一番に間に合うようにつつて。ここに送ってくれる巡查部長さんと落ち合って、いの一番に、一番最初に、改札に通されて乗せられてきたんですけどね。入院すすめに来た、ヨシダさんという方が、県の衛生係の人が、福島の駅のホームに出て来て見送ってくれてたんですよ。連絡があったんでしょ。私たちが青森に行くっていうことが、わかって。福島の県庁に勤めているヨシダさんという方がね、福島駅に見送りに来てくれてね。キャラメル、箱一つね、土産にくれたのを忘れられないんですよ。

仙台駅に着いたらね、弁当食べる時間になったら、付き添ってきた巡查部長さんが、手の上に脱脂綿を載せてね、弁当買ってあげるから弁当代出しなさいって私の父親に言ってね。あの当時、50銭か60銭だったかね。お金出すっても、手に、直接触れないように、手の上さ脱脂綿を載せて、その上さそのお金を出させて、それでそのお金で、仙台駅で、ホームさ行って、弁当売りから、弁当買ってきてもらって。それ食べながら来たなっていうのを、まだ思い出しますけれど。昔は、ほんとにね、今から考えると、異次元の世界だったからね。

〔お召し列車に〕看護師さんなんていない、いない。警察署の巡查部長さんが、それから東白川郡からお婆さんの患者も一人乗って3人で来た。そのお婆さんに付き添った巡查部長の人もいたもんだから〔巡查部長は〕2人いたんですけど。1両の半分がね、ちょうど、日支事変で、戦地で亡くなった兵隊さんの遺骨を棚に、いっぱい積んでね、霊柩車だったんですよ、半分が。半分がわたしたち患者を送るために、貸し切ったあれでね。戦争始まったばかりで、たくさんの白く包んだ遺骨をね、棚にいったんぎっしり、こう詰まったのが半分、私た

ちが半分3人乗ってね。昔は複線でなかったから単線だったからね、東北本線は。そうするとどんどん軍用列車が南下していくのに行き会うわけですよ。そのたびにどんな位置でもこう待機してやり過ごすもんですからね。兵隊さんとか軍馬を積んだ列車とか覚えてますけども。あの当時戦争に送られて行った兵隊さん方がね、どれだけ生きて帰ったのかなあと、思うときよくありますけど。とにかく1日ばかりで福島から送られてきたんですよ。朝の一番列車で来たのが、〔夜の〕8時近かった青森着いたのね。私は生まれて初めて一昼夜乗せられたもんですから、乗り物、弱くてね、もうげろげろ吐いたりね。もう、さんざんな目に遭ってきたんですよ。

治すために患者を集めるんじゃなくして。皇室の方がおいでになったら、醜い顔をさらせる患者を直接会わせないようにとかね。外国人が来たら、そういう患者に会うと困るからってんで。日本人が、日露戦争に勝ってからこう、世界の列強にして、一流国になった国が、患者を野放しにしているのが、外国人の目に触れると恥ずかしいっていうのでね。とにかく、浮浪らいつてのが、昔たくさんいましたから、神社や仏閣にあの、やつしてね、どこの町にも駅にもたくさんいたんですよ。乞食したりなんかしてね。物乞いする。そういう人たちが、そういう外国人とか皇族の人たちの目に、触れるのは困るっていうので、とにかく集めなくちゃいけないって作ったのがらい予防法っていうんで。明治の42年、北海道と東北6県で国立で建てたのが松丘、北部保養院なんですよ。

院内通貨

私が来たときなんかはね、この頃に私が使ったのが、これ〔院内通貨〕。ここの療養所で、あったんですよ。私が入院したころ、現金を普通の銀行で下ろせられなかったんでね、これは5銭、菱形のは1銭、楕円形のは10銭、これは5円だったかな、1円だったかな。なんでこういうものを使わせたかっていうと逃走を防ぐためにね、外に出さんように。これはね、多磨全生園でもね、愛生でもどこでも使ってたはずなんですよ。これは大阪の造幣局で作ったのですから。

(あとで紙に換わりませんでしたか?)

昔は紙だったのをこれ、偽造事件が起きてからこれにしたんです。昔は患者に対するお金の支給ってのは1銭もありませんでしたから。入院してくると、うちからの仕送りが一番の頼りだった。その仕送りが書留郵便来ると、分館って今の福祉室に係員の人が、郵便局に行って書留をもらってくると、これ〔院内通貨〕に替えてくる。これを持たせると、もう逃げる心配がないっていうのでこれ持たせられた。私たちが来たときこれがお金だ、とみなに言われて、みんなすり替えられてこれ渡されたんです。うちから仕送りが5円とか10円とかって昔の金で来ると、みなこれで下ろすんです。そういう時代でした。

これではね、どこ行っても買い物もできないしね、全然ね、ここ以外に通用しませんから。ここの購買店でしか通用しなかったからね。だからうちの事情でなんとかってうちに帰った

いって人はいね、着物を送らせるわけですよ。着物。裕とか綿入れとかね。その入れる中にね、5円札とか10円札を入れて送ってくるわけ。それを持って逃走してくわけ。いろいろとあの手この手使ってね。

〔院内通貨の〕裏に番号がかかっているはずですよ。ときどき検閲されるわけですよ。検閲、現在、どれだけのあれがあるかっていうので、はんこを押すわけですよ、金でね。その数字の入っていないのは使われないです。穴の空いたのは5銭。楕円形のが10円でね。

(院内通貨に統一して入っている2590は、皇紀2590年に作ったということでしょうか?)

何年か1回に、はんこ押して検閲したもんですけれどね。これ〔院内通貨〕は貴重品だから特に残したってんでなくしてね、あの、こう新円切り替えのときにもう価値がなくなってたんですよ。ほとんどインフレで切り替えても切り替えなくても同じような状態だったんですよ。何の効果もなかったんですよ。その当時は、政府で発行してた札がもう横行してたからみんなこうどんどん入り込んで、これ追いつかなかったんですよ、この価値がね。

北部養院初代院長の中條資俊院長について

資俊先生は研究室、なんとかしてこのらい病の治してやりたいってのですね。一所懸命ね、いろんな木の、樹液を集めてね、シバとか、ヒノキとか、青森特有の木を傷つけて、したたり落ちる露集めて。町の製材所に行って、シバのおがくずをね、もらってきてそれを蒸留して、いろんな薬と化合してね、それを患者さやるわけですよ。研究して。長く前からいた患者はもう、根に持って、研究材料にされるから嫌だってね。新患者では何もわからないから、来た患者には必ずその自分で、作ったTRっていう薬を必ずやらされたですよ。私もやられてね。血管注射ね、1週間2回ずつやらされるわけ。それが何の効果もないってことがね、他の先生方も言ったときに、確かにそれは効果あるよって自分から証言したっていうような記録も残ってるけど。とにかくもうなんとかして治る薬を作ってやりたいっていうので、一所懸命、やって。

あの昔は徴兵検査で病気が発見されるということがよくあったんですよ。黒石市から来た青年と、五所川原市から来た青年と、西海岸の鰺ヶ沢から来た、徴兵検査で3人の若者が、病気がわかって送られてきたわけですよ。そしたら、その3人の人たちにね、男性の睾丸にね、あの自分が研究した注射をね。そしたら1人の人が、ばい菌入ってね、睾丸の袋がこんなに大きくなっちゃった。それを、熱冷ませるためにね、その当時、患者たち、食べたことも見たこともなかったような牛肉を、荒縄でこう、縛って下げてきて、そして、これで冷やせて置いてったそうですよ。ところが、同じ部屋にいた連中は、牛肉なんて食べたこともないような連中ばかり、それで牛肉がそれ来たっていうのでね、それみんな自分たちで炊いて食べてしまって、その患者に使わせなかったわけです。そしたらその患者がね、何日か経って、苦しんで苦しんで死んだそうですよ。あとのばい菌入らなかった人は、恐れをなして逃げていって、いなくなってしまったそうです。それが大正12年だそうですから、ちょうど東

京の大地震のあった年でしょうね。私なんかでも、あの、TR っていうのをよくやらされました。

とにかく治療に熱心な先生だったんですよ。いろんな薬を作っては、患者にやったり。結局被験体ですね。話に聞くと、生体解剖なんかもしたって話も何回かあって、ありますしね。病気が治る見込みなくなってからまた、生きてるのに解剖したっていうような話も聞いていることは聞いていますし。で昔は、解剖室ってのはなかったからね、その山の上の、林のなかに穴を掘ってね。誰かが死ぬと、患者たちが担架で担ぎあげて、山の林の中に掘った穴に。夜も寝ないでね、野犬が来たり、蚊が来たりするから2人か3人、輪になって解剖してくれる先生を待ってたそうです。解剖っていうのはもう、中條院長はすごく熱心な方であの、東北大学の医学部にわざわざね、解剖する先生方を頼みに行って、解剖してくれるようになったらしいんですけど。電報、昔のことですから電報打って、ですぐ来れるときと来れないときとあるわけです。先生方が、よそに出張したりなんかしてね。そうすると、2日も3日もその、穴に置いた死体を守って患者たちが、団扇であおいで蚊を防いだり、なんかして夜もね、大変だったそうです。そういうこと実際やった人たちから聞いていましたけどね。

大風子油とセファランチン

同じ部屋に15、6人もいますからね、夜、夕食食べ終わると、さあ始まるかっていうのでその、注射器を、みんな出してきて、炉端で、あの煮沸っていう熱湯さ、注射器を入れて消毒してね、それで大風子油、これも大阪の岡村平兵衛っていう薬店があったんですよ。患者が、2円か2円50銭か送ってやると、その大風子を送ってくるわけですよ。で患者たちは、町の、行って注射器を買ってきてね。どこの部屋に行っても夕方行くと、大風子ってのは蠟みたいに固まりますから、それを溶かして、注射して、一番最初こことか、こことかね、注射するんですよ。毎週1回か2回。

消毒が不完全で、化膿することがあるんですよ。そのときは初めて医者に、なんとかしてくださいって持って行くわけです。医者なんにも言わないで切開して、私なんかこんなに傷ありますよ。化膿して膨れちゃって。

(大風子油は効果ありましたか?)

大風子油は、一番の効果あるって言われて。ほとんどの人は、大風子の治療やってみましたね。園長が開発したTRっていう血管注射は、みんな嫌がって。私も、その話聞いてから、大風子に切り替えてくださいってお願いに行ったんですよ。そしたら、中條園長が機嫌の悪い顔してね、ぶさっとしてね。しぶしぶ、大風子に切り替えてくれたんですよ。それから大風子一本にやりましたですけど。患者たちが、こういう椅子が、こういうテーブルの、ざーっともう50人も100人も並んで、こんな馬にする注射をね、注射器こんなおっきなやつをね、それでぶすぶすぶすぶす刺して。ずっとこうやってね。針の太いやつをね。みんなこう肌出して待ってるわけですよ。ずーっと並んでそれをおすって刺してぎゅっとやって、ぶす

っとやってぎゅっと刺すって言って1人5グラムずつぐらい、こう刺してもらうんですけども。ときどき今度は化膿する患者が出て、私みたいに、こう切開してもらう。そういう治療の状態でした昔はね。

(昭和12年頃、色素剤を使いませんでしたか?)

それはね、セファランチンって言ってね、昭和19年に、飛行機に乗る兵隊にする注射と同じとか何とかっていう触れ込みでね、よく効くからってやらせられたんです。「治らんちん」って言って、言葉が残るほどね、全然効果なかった。かえって悪かったですね。

ここではね、お医者さんがいなかったんですよ。薬剤師の人がね、医者代わりで往診して歩いたんですよ。そのような状態でしたから、セファランチンが1種類ぐらいじゃなかったですかね。うん。セファランチン19年でした。19年の秋でした。

戦争に入ったころは、TRはもうない。院長先生も(…)にあたって倒れてからね、出てこなくなったでしょうが。いや、私がセファランチンの注射や、あの治療受けたのは、東北新生園にいたときなんですよ。

院内の小学校卒業後、病棟看護などを経験

松丘小学校、1番最初に、昭和13年にできたんです。〔写真を見ながら〕こっちは半分が1年生、2年生、3年生、4年生の下級の教室で、こっちが5年生6年生、高等科1年2年の教室で、教室で真ん中に、教員室があつて。朝の朝礼する広場が真ん中にあつて。職員室ではこんな小さいのがあったきり、いう程度でした。世界地図、大きな地図と、地球儀1つと、あと何にもないんです。私、ここ〔北部保養院〕の小学校卒業したのが昭和14年でね、いや15年。15年の4月か3月で、尋常6年生を、尋常科の6年生を卒業させてもらったんですけども、これ2年も3年も遅れての状態でしたからね、うちにこもってた分、遅れてずっと遅かったんですけども。

自由室って言って、うちのほうでは3段階だったんですよ。健康室と自由室と不自由室っていうのがね。健康室っていうのが農園室で野菜つくる、部屋が7室あつて。自由室っていうのは、病棟の看護とか、給食の炊事の、飯炊き、配食ね、そういう仕事をやるのが自由室で。あと不自由室ってのは、看護を受けるこう手足の丸くなったりして、働けなくなった人が不自由室。3段階あったんです。

小学校卒業して自由室に変わったときから、病棟の看護に出されたんですよ。毎日ね。私は、15、6歳で病棟の看護を持たされたんですけども、1日のうちに時間を割いてこの、傷の手当が大変なんです。朝の6時に出勤していきますと、まず一番始めにはあの、尿器投げ〔捨て〕。便器がね。便て、便所に投げて〔捨てて〕それを洗って、みなで夜、夜のうちに排便さの、おまるって言ってこう便器をね、それ、持ってって、流してそで洗ってきて。それから炊事場に、行かないとお湯がないもんですからお湯沸かす機械も何もないしね。天秤棒で担いで、炊事場までお湯をもらいに行つて、ほで洗面器でこう移す、みんなに顔洗わせる

んですよ。顔洗わせて、洗面が終わるとこんどは煙草のむ人には缶詰、缶に火を移して、炭を入れて火を起こしてね。これをもって持って1人ひとり、煙管に煙草を詰めてのませるわけですよ。1人で3杯くらい3服か4服のみますから。全部の人が煙草のむわけじゃないからね、のむ人だけが、朝、飲ませてやって。炊事から配食されてきたのを、ご飯とおつゆと大根漬けぐらいのもなんですよ、おかずってね。魚なんてめったに来るわけじゃないんですよ。それをこんど配食して、食べさせて、目の見えない人にはこう介助しながら食べさせてね。

そうすると、1日、日給で1日4銭なんですよ。4千円じゃなくて4銭なんです。その4銭という〔日給の問題〕のがね、長島愛生園の大争になったんですよ、昭和11年に。患者150人分の予算が、国立にきていたとき、光田園長が200人に増やして150人の予算でまかなってたのがけしからんっていうので、ハンストまで起きて大争になったんですよ。なぜかっていうと、1日働いて20銭払っていたそうです。それを15銭になったそうです。それが悪いて騒ぎを起こしてるときに、私たちが働いたのは、1日たった4銭ですよ。ずーっと働いてます、給食に、せっせと仕事に出ても。なぜかっていうと、二田貞治〔フタタテジ〕っていう総務が、独裁者がいたんですよずっと。その人が牛耳っていたからね。全部、作業賃をもらってくると夜中に自分で計算して、そいで各室長に、働いた分、これこれだって言っただけで渡すのが、私達は1日4銭しか払われていなかったの。毎日のように、病棟の看護に出されたり。3週間続けると1週間休ましてくれるんだけど、誰かが、亡くなると今度は火葬係に出されるわけですよ。よく昔は、亡くなったんですよ。結核とかね、栄養失調とかで。1年に60人も死んだことが普通あったわけですよ。ですから、しょっちゅう火葬があって、3人の人が、火葬係つって出されて。立棺〔たてかん〕て言っただけで、座棺でも言いましたけど。今のような寝棺じゃないんですよ。それを2人で担いでね、行列つくってずーっとお坊さんが先頭立って、火葬場まで送ってって。屍をさげて。そやってみんな帰るわけですよ。仏様にあげた団子とかご飯とかね、おこわとか、供え物をお椀にこう、白いなんか飾ってこう供えるじゃないですか。それが火葬係にとっては一番の魅力なんです。食べもんなかった時代だから。火葬が始まって、炊き出しに、お板をずっと引っ張り出して、そこに供えられた団子とかなんとももらってきて、それを並べて焼いて、3人で分けて食べるわけですよ。そういう時代だったから、それが、1日働いてさ、火葬係に出されるのが、1回やって3銭なんです。それから不自由者の看護に付き添い、看護じゃない通い看護ってのも3銭なんです。

新城の殿様と言われた二田貞治総務

これはすごい統率力のあった人でね。これは1回『甲田の裾』に書かなくちゃいけないことなんだけどね。これは松丘唯一の暗部っていうか、暗い部分がね。全うした人ですよ。亡くなったときはもう園葬までして、葬式出された人ですから、そんなとき私いなかったですけどもね。すごい独裁者でした。秋田県の人なんですけどもね。25、6歳でね、大正4年に入院してきたそうですけども、そのときは草履履いて着流しに、風呂敷包み1つだけ提げて入

ってきたっていう人なんですけどもね。その人が、なんて言うのか丸め込むのが巧みな人でね。もうあらゆる実権を握ってしまっただけで、独裁者長く10何年か20年、続いたんでしょう。昭和18年に亡くなってますけどもね。もう室長任命するのもね、みんな自分の采配でやる、任命しますから。自治会ってのは名前ばかりで自治会の裏に隠れた独裁者でした。

売店があって、園内の購買部だね。その購買部っていうのが、二田総務ががっちり握って、決算報告とかなんとか何も無いの。1年にお盆と正月には、各室長たちが競って、壮大にお中元とかお歳暮とか持ってくるんですよ。正月、私も実際にお歳暮を持ってくるのに、手伝わされたことがありますけど、ちょっと『甲田の裾』にも書きましたですけど。室長たちは総務の気に入ってもらいたくてもう、争って購買部からミカン、木の箱のね、こんな箱の1箱買って、それを総務にお歳暮として届けに行くのは、義務感みたいになってたんですよ。総務の方ではもらったミカン箱を手を付けないで、みな購買部にまた回すわけですよ。だからそれが、何十人という室長たちがいましたから、その人たちがみな同じように、木の箱のミカンを先方に持って行くもんですから。もう売店で、ぐるぐるぐるぐるサイクル回って、回るたびに利益が、総務さ入るような仕組みになってたんです。

昔は、浮浪患者になんかは、どうしようもなかったそうです。一年中博打ばかりやっててね。中條院長なんかは若いとき、病棟のトイレまで掃除したっていう時代があったそうですから。患者たち働かないでね。言うこと聞かないで。ほど青森の警察が来て、取り囲んで、博打を止めたなんて話もありますけども、そのときだけ止まるけどもまたまだやっていたんだけども。

二田って人が実権握ってからね、あの一年中、博打やるのは、よくないからっていうことで、12月から3月末まで、賭博やるんですけども。それに使う花札とか、サイコロとか、みな自分で買って整理して、それ3倍ぐらいの値段で売って、それを使わせて。それ以外のもの使ったら、大変だったんです。私の来たところによく言われたのは、何かちょっとおかしいことをすると、すぐ「行李しよわせるぞー」っていう患者たちの慣用語があったんです。行李、今ではトランクとか、そういうもんですけど、昔行李に、あの衣類なんかさ行李さしよって、入院してきたり、逃げ出すときはそれ持って逃げたりしたもんですけど。何か、二田総務に気に入らないことやった人は、いっぱい折檻されて、これしよわせて追放されるわけですよ。だから「行李しよわせるぞ」っていうのが追い出してやるぞっていう脅かしがね、ええ、そういうことがしょっちゅうありました。

この人は、何回も結婚してるんですね。だから病気の軽い女の人が入ってくるとね、みんな自分でもう手を付けてしまうわけですよ。〔『白樺』70年の中に書いた〕武田牧泉〔タケダボクセン〕という人は、小学校の教員で、病気になって入ってきた人で岩手県の盛岡市。この人はね、想いを寄せていた女性が二田総務の子どもを産んでしまったんですよ。それでもって、自殺してしまうんですよ。武田牧泉って、短歌会を作った人なんですよ。白樺短歌会をね。20何歳でしたでしょうね。私がきたときはもうすでに亡くなってましたから。

〔二田総務について〕書く努力しさえすればなんぼでも書け〔ますし〕、書いてますし、資料も私集めてたくさん持ってますから。私の健康が、今、糖尿病でね、3、4年前に、ちょっと死線さまよったんですよ。20年ほど前から糖尿病なもんですから。大変だったんですけども、なんとか今、少し持ち直して、こうして生かしてもらってますけども。生きてるうちに、そのことは書いておかなくちゃいけないな、と思ってるんですけどね。

脱走して行商をする

そういう時代ですから、私はまだ若かったからね。うちから毎月っていうより、兄弟たちが東京で旋盤工したり縫製工場で働いたりして仕送りしてくれましたから良かったんですけども。全然、収入がない人が多かったからね。絶望して、脱走したんです。そういう一斉収容で狩り込まれてきたて、院内ですっとうこう馴染めない人がいるわけですよ。そういう人たちついてきて一緒に、行って。

私の父親が亡くなったときに残した着物なんかをね、質に入れて7円なんぼだかになって、4人で青森から、今のむつ市っていう田名部町までね、7円で汽車賃、払って。そして、あそこの安い宿に1部屋借りて、問屋からナフタリンをいっぱい買ってきてね。それを溶かして、いろんな型があって、食紅で青とか赤とか紫とかかっていろんな色つけてね。トイレの臭気抜きつくるわけ。臭気抜きってのは、昔そういうのが、どこの家庭でも必要だったんですよ。そういうものとか筆筒に入れるナフタリンを、いっぱい買ってきて。セルロイドの袋を、色があるのをこうつくってそれに6つとか10とか8つとかって、入れて。それを、家を1軒1軒回って行商して歩くわけです。私もまだ16歳でしたから、なんやかや大人のやるのを手伝っていたんですけども、だんだん慣れて、1人で商売できるようになって。4人で1ヶ月半ほど下北半島寄って、それから八戸に行ったら八戸で泊まる宿屋が見つからないって。今、南部町っていうようになってる昔、剣吉村っていうところに、安い宿屋があって、そこに2ヶ月ほどおって、青森県の南部地方に。それから、岩手県の県北地方まで、汽車やバスで行って、行商して歩いて、でそこ終わってから秋になってからこんど、岩手県の宮古って今回の地震の津波で水害の出たところなんですけどね、そこの、知り合いの安い宿屋が木賃宿。昔はそういう、商売してる人たちがいっぱいいたんですよ。こうもり傘の修理し、それから刃物の研ぎ師とかね。それから、お坊さんに扮して、仏様を箱に入れてしょって歩いて、お札を売って歩くとかね。そういうその世間師って言ったんですよ昔。一般の人たち、貧民窟にしか、住めないような人たちがたくさんいたんですよ。そういう人たちに混じって、旅館を渡り歩いて。私は、正月近くなってから、寒くて行商もできなくなってから、親方と別れて、うち〔自宅〕に、帰ったんですよ。

自宅から釜石へ

昭和17年に〔自宅に帰ったら〕、村の駐在巡査が待ち構えててね。また東北新生園に入れ、

東北新生園で近くにいい病院できたから今度入りなさいって、しつこくしつこく、来るんですよ。だけでも私って、まだ外見上はどこもなんともなかったからね。身体に斑紋があちこちにあったんだけど、外見にはわからないわけですよ。んだもんですから私も諦めきれなくてね、行商時代に岩手県のあちこち歩いてたときに、釜石、釜石市の町を歩いたもんですから。町の職業紹介所でね、軍需工場の工員募集が、全国の軍需工場のビラがたくさん貼ってあるんです。東京のはたくさんあったんですけども、東京には兄貴が旋盤工したり、姉が縫製工場の女工してたりして、迷惑かけるの嫌だからってんで。じゃあ逆のほうにって、釜石市の製鉄所のビラがあったから覚えてたからね。役場に行って、戸籍謄本をちゃんととって用意して、いつでも高飛びできるようにしてて。で、巡査の言うままにして、郡山の家に9月22日の晩に行って、23日に駅で落ち合って一緒に新生園で入院しますからって約束して。でその前の日に、釜石さ飛んでしまったんですよ。

2日間に渡っていろんな就職試験があるわけですよ、戦争中でもね。身体検査もあるし国家試験もあるしね。荷物調査をやるのが、ちゃんと戸籍謄本を出していましたから、信用されて。国家試験を通して、いろんな知能試験なんかやって。釜石製鉄所の加工課の、精密器械組立工で職名もらってね、就職できたんです。就職できて、職場中でも20人ほどいたんですけども、みんな途中からね、招集が来てみんなあの、兵隊に連れて行かれるわけですよ。戦争から戻ってきて傷病軍人上がりの人たちが残って、職場を守っていたんですけども。私も一冬、越えたら、手に麻痺が進んでね、あの使うスパナとかスレンチとかペンチとか、ああいう工具が、みんな金なもんですから、握る力がなくなってぼとぼとと落とすようになったんですよ。

(知覚麻痺が始まった?)

ええ。麻痺が始まったんですよ、手の。こう〔変形〕じゃなかったけどもさっと見てわからないぐらいだけでも、手の力がなくなってこう、仕事中にポロっと落とすわけですよ。あーこれダメだなと思ってね。ほでそのときに風邪ひいたんですよ、熱出したんですよ。高い熱をね。1週間ほど仕事を休んだもんですから、病院通いしてたんです。ちょっと体力なくなったから、うちに行って養生してくるから、休暇願いを出して、東北新生園に入っちゃった。それまですごくね、職場でも大事にされてね、いい仲間たちがたくさんいたんですけど、そういう状態で。

東北新生園

東北新生園に近いもんですから、うちの母もなるだけ近いとこにいてくれっていうようなことで、東北新生園に入って。東北新生園の園長の鈴木立春て先生はこの外科部長やった先生で、よく覚えてる先生なんですよ。私が行ったらもう、来たか来たかってね、抱きかかえてね、頭なでてくれてね、喜んでくれたんですよ。それが昭和18年です。18年から20年の春までね、東京大空襲のあったときには、東北新生園にいたんです。

あそこは村との交流もあったし、隠れてなかったから自由に出入りできたしね。食料も十分ではないけど村の農家を回って鶏なんかでも自由に行って食べることもできたからとっても良かったんですけども。〔以前〕外に出て働いたときのお金を、預けていたんですよ、井原金太郎さんという親方にね。その人が昭和 19 年に、ここ〔松丘保養園〕に入院してたんです。私もお金がなくて、小遣いに困ってね、ちょっとでもいいからもらいたくて、もらいに来たんですよ、松丘に。預けた金をね。あの当時ね、35 円だからね、今での金でしたら 350 万ぐらいあったんでしょう。それを預けていたもんですから、少しでももらって帰ろうと思って来て。来たらね、たいした喜んでくれてね。2、3 日泊まって知り合いたちから招待されてご馳走になって。帰るときに井原金太郎っていう親方が夫婦でもって、あの当時統制で自由には買えなかったリングを、リュックサックいっぱい買い込んできてそれを土産に、東北新生園まで夫婦で送ってくれたんですよ。お前から預かったのは必ず返すから、金に困ったら、いつでも青森に来いって言うからね。そういう、条件があったもんですから、20 年の 3 月の末に、こんどは東北新生園を抜け出すことにしたんです。それからずっとここでお世話になってるんです。

戦時下のこと

やっぱり食料難ですね。とにかく栄養失調でたくさん亡くなってましたから。ここみな畑にしてね、農園室の人たち、作った野菜を炊事に納めるんですけども、食料がどんどん厳しくなると、みんな作ったものを自分のうちで食べてね、野菜を作って畑を作ってね、作っていない人たちに回っていかないんですよ。そういうことで、だんだん栄養が、偏ってしまって、栄養失調で死ぬ人が多かったですね。

結核も戦争までは多かったですね。病気が重くなってくるとね、結節型の人と、神経冒されて目が見えなくなる人とね、それから喉が塞がる人とかね、たくさんいましたから。義眼入れてもらった人なんかはね、自分の飲んでる茶碗に義眼外してね、それで洗って、また目、入れてそのお茶を飲んでるのん見たことありますけどね。すさんだ生活もあったですね。昔はとにかく大風子油の力だけではどうにもならなくて、みんなが病気が進行していきますから、ほんとに可哀相でした。

〔『創立八十周年記念誌』を見ながら〕これは相撲取りですよ。これはね、一年に一番盛り上がるんですよこれ。お盆近くだったと思うんですけどもね。山の上のグラウンドに〔土俵を〕作って。行司の姿なんかもね、みな衣装作って。私も力士に出ました。随分、年寄りとか、あの体格にあわせて。横綱から、三役から、平幕からみんな作るんですよ。東西に分かれてね。

松丘保養園でのプロミンの治療

プロミンはね、昭和 25 年でしたかね。多摩全生園で大した良い成績上げてるそうだったい

う情報が入ってきて。私もその委員の1人になったんですけども、プロミン獲得運動ってのが起きたんですよ。松丘にも、そういう特効薬ができたんなら、吉富製薬で作ってるそうだと。だから、少しでもそういう薬が配給されるようにってことで委員会作ってね。みんなの決議云々なんかを持って、上京させてね、陳情させて。そしたら10人分くらいかな、10本ぐらいのプロミンが配給されてきたんです。それを、病気の重い、結節型の人ばかり特に選んでその人たちにやったらね、もう1ヶ月ぐらいのうちにだんだんその傷口が塞がって乾いてきて治ってきたとか、そういう効果が現れてきたわけ。ますますプロミンの効果ってものみんな期待して、今度もう、我も我もと殺到するんですけども。肝心の薬がそんなに来ないわけですよ。それでますますまた自治会の仕事として働きかけに一所懸命になってね。少しずつ少しずつ増えてきて、プロミンの専用の注射場も建てられて。あれ、桜井園長のときなんだけども、それで始まったんですよ。私は、第4期か第5期目に、あったんですけども、かえってね、眠ってた血を騒がしてしまって、病気がかえって再発してしまったの。それは悪影響があった。それまでね、手足の麻痺は落ち着いたけども、まあ緩やかな麻痺だったの。それが急に爆発して神経痛がものすごく、手足の神経痛が。口の舌が腫れて、感覚がなくなって、何を食べても味がないんですよ。熱は30度も40度も出してね。大変なことがずっと1年近く続いたんですよ。内科の先生が、あんたは、プロミンが合わないんだから、やめなさいと。ようけにしたらだんだん落ち着いてきて。昭和31年には、菌がなくなったってことが菌検査での〔証明〕されて。もううちさ帰ってもいいよって言われたんですけども、手足が麻痺してるうえに、結婚して、不自由な、片腕のない女房だったけども、女房もいたしね、それだけの生活も成り立たないから、どうか置いてくださいっていうようなかたちですと居続けてきたのが、今になってるわけです。

(副作用がすごくて効果がなかった人もおられたんですね?)

そうなんです。「病気が騒ぐ」って言ったんですよ。その通りなんです、それが。頭の神経痛がね、毛細血管がぐーっとなるほどね、言葉にならんほど、夜昼、痛むんですよ、痛みが走るんですよ、手足、ね。そういう苦しみが半年続いたんですよ。それまでずっとプロミンやってきたもんですから、先生もこれ、プロミンの反応だなんてこと、気がついて、やめなさいって、お医者さんは言ってくれたから、プロミンやめたんです。結節型の人はそのような反応が全然なくて、すーっとどんどん良くなってきたの。だから、結節型には一番効果があったんですよ。

(周りの方も含めて完全に落ち着いたなと思ったのは昭和40年ぐらいからですか?)

いやいやいやその前からですよ。昭和30年代には退院者が始まりましたから。ええ。ぽつぽつと、そんなに大勢じゃないでもね。若い人たちが退院していった人たち、何人かいますから。あまりここでは退院者はそんな数多くなかったですけども。

文芸活動

私、子どもの部屋から大人の部屋に行ったときに自由室って室の室長が小山冷月〔オヤマレイゲツ〕さんって、川柳を作りながらね、『甲田の裾』の編集をやっていたんですよ。私、小使いみたいに使われて、手伝わされてね。で、川柳を作りはじめたのが最初なんですね。東北新生園に行ったら俳句だけ作っていましたから、俳句、作らせてもらったらね。こっちに帰ってきたらこんどは仲間たちが、短歌作ってたもんですから、短歌のほうに、首突っ込み始まったのがそもそもの始めです。

(毎号ほとんどに短歌が入選され、膨大な歌を詠まれていますね?)

まあ書くって、数って、長生きさせてもらってるから今でも。短歌に『甲田の裾』載せてくれるの私の歌だけになりましたから。灯火、絶やしてはいけないなと思って、年寄りのつぶやきとして、作らせてもらってますけども。若いころはね、生きた証として、なんとかして形に残せるものとしては短歌ぐらいのもんだなと思って一所懸命やらせてもらいましたから。

(歌集が昭和の何年ですか?)

昭和31年です。はい。単行本として歌集があの出したのは、松丘では一番最初ですね。後から何冊か出てますけど。強制収容時代に医務課長としてここに勤めておられた内田守人先生がね、短歌で一所懸命、患者を励ましてくれた人なんですけども。長島愛生園の医官をしていたときに、明石海人っていうね、すごく優れた歌を出して。明石海人の歌集を出すときのプロデュースしてくれた先生なんですよ。私が松丘に帰ってきたときには肺結核のために、ちょうど松丘を辞めて行かれて、熊本に帰られたんですけども、うちの短歌の撰者をずっとやっててくれたわけ。私の撰をしててくれてね。撰を始まってからいくらも経たないうちに、「歌集出しなさい、歌集出しなさい」って勧めてくるようになったんですよ。それで私、北原白秋の『多磨』っていう、これ廃刊になりましたですけども、その中央雑誌に、入っていたもんですからね。その『多磨』が廃刊になって。当時、中野菊夫先生って療養所の、短歌にすごくすごく理解のある先生がね、いたもんですから、うちの内田守人先生と中野菊夫先生と二人に、両方の先生に、ここの白樺短歌会を撰してもらってたんです。白樺歌集ってね。中野先生が熊本に行ったときに、たまたま内田先生と一緒に会う機会があって、そのときに、「青森の滝田十和男の歌集を出してやろうじゃないか」って相談がまとまったらしいですよ。中野菊夫先生が、全国のハンセン病の療養所の短歌と、結核療養所の短歌と合わせて『試歩路』っていう全国のコングレガートン歌集を出してくれたんですよ。ええ昭和30年にね。その歌集を見た、当時の売れっ子の人気作家の、なんていいましたね私名前忘れるんですけども。小樽出身の新聞の連載小説なんか何本も持ってた先生なんですけども。その先生が文芸雑誌に、私の短歌を目に止めてそれを紹介してくれたんですよ。それがあつたもんですから、中野先生と内田先生が、熊本行って会ったときに、「歌集出してやろうじゃないか」っていう話がまとまって勧めてきたわけですよ。

私お金もなかったんですけど、なんとか友達から借金してね。100冊ほど出せばいいかなと思ってたらね、中野菊夫先生は1000冊出さなくちゃだめだと。500ぐらいではしげきる〔ママ〕からっていうのでね、1000部を発行することにしたんですけども。それには5万円が必要だって言われたんですけど、私2万円しか持ってなかった。友達から、いろいろ借金してね、5万円つくって送ったんですけども。中野菊夫先生も生活があんまり豊かでなかったとみえて、私の歌集の、500冊は来たんですけど、代金が全然来ないで、そのままで終わったんですけども。

院内では、大変なセンセーションを起こしたわけですよ。誰も歌集なんて出したことないし。明石海人の歌がね、昭和の百人一首になるほど短歌会で認められたとかでね、滝田も歌集出せば儲かって、うち1軒も2軒も建つほど儲かるんだって言って、当時、それができてね。金儲けのために歌集出すんだってというような、もっぱらに言われてすごく大変だったんですよ。ですけども、今の福祉室長に当たる分館長の星正之っていう人が、すごく理解があってね、職員の人たちに募金活動始まってね。松丘で初めての歌集だから、みんなで助けてやろうじゃないかっていうのでね、職員がみんな募金してくれて、それが3700円だかが集まってね、それでも歌集出す足しにさしてもらったってというような、ありがたい話もあったんですよ。ですから、歌集が出てから私、それを、あちこちに、図書館とか、保健所とかに送呈するのに、封筒買うお金がなくてね。工事場で投げて〔棄てて〕たセメントの袋を拾ってきて、それを封筒に作って、それに入れてあの寄贈本を郵送したってというような状態だったんです。でもそれが当時おかげさまで1冊残りましたから、貴重な記念になりました。（その想いを90年誌に書かれているんですね？）

そうですね。私もね、療養所にいて、ほんとにかわいそうな人生送ったっていう風に、思われるかもしれないけども、療養所は療養所なりに、やっぱり人間の生きる社会ですから、生きた社会ですから、それなりにね。やっぱり人間として生かしてもらってありがたいな—と思ってね。みなさんに支えてもらったから、これが今まで生きることができたと思うんです。私一緒に暮らした人では、開放性の結核が流行って、同じ部屋に12人も暮らしていると誰かが、新患者で結核持って入ってくると、2、3人はもう感染するんですよ。結核で死んだり、栄養失調で死んだりして、若いうちにたくさん亡くなったそうで。90まで生かしてもらったっていうのはね、みなさんの支えかな—と思ってね、いっつもありがたいと思ってますし。兄弟たちも長生きしてることによって喜んでくれるしね。私の家系で3代も4代もこう遡って調べても72歳以上長生きした人誰もいないんですよ。それが私が90まで生きたんですから。私の弟が88歳かな。その下の弟が80歳。兄が93歳で去年亡くなったんですけども。そういうような状態になって私も90歳を迎えるまで生かしてもらいましたから、もういつ死んでも悔いはないんですけども、こうしてみなさんがね、来て、お話してくださる、聞いてくださるってということだけでも私の喜びですし。

カトリック教会の信徒として

教会の世話になってるんですよ、カトリックのね。信徒会の世話も、させてもらってますし、外の健常者の信者の人たちもすごく来て応援してくれるんですよ。その当時のね、全国の療養所でうちの教会だけなんですよ、伝道館で集会所持ってるのね。カナダの宣教会の神父様が、カナダの教会に呼びかけて、御御堂を建ててくれた、伝道館を建ててくれたりね。御御堂はどこの療養所にもあるんだけど、伝道館まであるのはうちの教会だけなんですよ全国でね。非常に恵まれた環境の中に置かれてますから、ほんとにありがたいなと思ってます。

こないだ札幌までね、付き添い付けてもらってね、カトリックの3年に1回ある、障害者の信者の、カトリック障害連盟っていうのがあるんですよ。それが3年に1回全国大会やって、今年は、札幌大会だったんですよ。出席してくれっていうことで来たんですけど最初は断ってたんですけど、今年からハンセン氏病の問題を分科会で討議してもらうから、資料をまとめて送ってくれっていうので、いろんな本や東北教会とかや、今東北教会とか言わないんですけど、教会でまとめたハンセン氏病の知識とか、それから、厚生省でまとめた全国の療養所の状況とかっていうのをリストに作って、うちの教会の沿革と一緒に送ったものですよ。それをテキストにして分科会開くっていうことになったんで、私も行かなくちゃいけないって。全国の療養所から誰も行かない。ここね仙台教区なんですよ。仙台教区から誰か一人来てくれっていうようなことになって。教会のいつもお世話になってる北川さんって女の方なんです。73歳の方。その方と、うちのセンターの介護長のクライシさんという、若いまだ49歳の男の方ですけど、2人に付き添い付けてもらって。飛行機で往復してもらって。8月の22、23に2日間に渡って、札幌、藤女子大学であった全国大会でね、出席して帰ってきたんです。すごくあったかい大会でね、ほんとに感激して帰って来たんですけど。90歳になってからはね、飛行機で往復して行って来るなんてこと夢にも思ってませんでしたから、すごく嬉しかったです。

本稿では、滝田さんがハンセン病療養所に収容されてから現在に至るまでの生活を、語りに基づいてライフヒストリーとして記述した。12歳で警察によって強制収容されて以来、数年間の逃亡生活を除いて、ほぼ療養所の中で暮らしてきた。院内通貨や患者看護などの経験は、私たち聞き手にとっては理不尽に感じられたが、滝田さんから不満や不平の言葉はなかった。坦々とした語りのなかに、限界づけられた環境のなかで、最善と考えることを選択し、それに打ち込むことで生きていく姿が浮かびあがった。滝田さんの生は、物理的な移動制限はあったものの、隔離政策による空間のなかに閉じ込められることはなかった。むしろ文芸活動やプロミン獲得運動、視覚障害者やカトリック教会での活動を通して、隔離された空間を開放するものであり、物理的境界を超えるモビリティを発揮した。滝田さんの語りに通底していたのは、今、生きていることへの崇敬と現在の生活を支える人びとへの感謝であった。

おそらく、これまでの苦労や苦悩を滝田さんは感謝の哲学を構築することで昇華したのであろう。次稿では、より具体的な生活状況について、滝田さんの語りに基づいて記述する。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「療養所入所者からみたハンセン病（らい）法制史」（課題番号：15K03164、研究代表者：和田謙一郎）の研究分担者として実施した。松丘保養園の皆さんに深く感謝している。そして、私たちを温かく迎え、話をしてくれた滝田十和男さんの御冥福を祈りたい。

注

- 1) ひらた・かつまさ、長崎大学教授、教育学
- 2) わだ・けんいちろう、四天王寺大学教授、法学
- 3) たはら・のりこ、四天王寺大学教授、社会学
- 4) ライフヒストリーを記述するにあたって、〔 〕内は、文脈を明らかにするために著者が補ったものである。また（ ）は、聞き手の質問である。

参考文献

- 国立療養所松丘保養園 1991 年『創立八十周年記念誌』
国立療養所松丘保養園 2012 年『松丘保養園写真集 松丘保養園の人々・日々の生活』

‘A sanatorium is also a society for human beings’: The life history of Towao Takita (1)

This paper details the life history of Towao Takita, who lived in Matsuoka Hoyoen, National Hansen Sanatorium in Aomori Prefecture, for more than 70 years. He was born in Fukushima Prefecture in 1925. He showed symptoms of Hansen disease when he was 10 years old. Towao Takita and his father, who had shown symptoms before him, were forcibly sent to a sanatorium by the police in 1937. After graduating from primary school at the sanatorium, he engaged in the work of caring for patients who were suffering from a more serious condition of Hansen disease. Once, he got an opportunity to work outside the sanatorium selling ointments around Tohoku area with his colleague and worked at assembly line of precision instruments with the license. On feeling numbness in his limbs during work, he went to the sanatorium, Tohoku Sinseien, to be cared for and finally returned to Matsuoka Hoyoen. He was a poet of tanka and haiku and published the book, as he thought in his younger age ‘Tanka is the only proof that I lived in this world’. He also contributed to the activities at the sanatorium, such as getting the proper treatment, acting as the secretary of the blind people with Hansen disease, and organizing followers of the Catholic Church.

When we visited him for an interview, he welcomed us and narrated his life experiences in detail. The interview was conducted on 2 and 3 September 2015 and 2 and 3 February 2016. Katsumasa Hirata (Nagasaki University), Kennichiro Wada, and Noriko Tahara (Shitennoji University) interviewed Takita for 8 hours. His narration was filled with the happiness and honour he felt in being alive in this world. He said, ‘Although people may think I am a poor person who has been isolated in a sanatorium all my life, the sanatorium is a kind of society of human beings and we have made the lives here the same as that in the outside world’.

He passed away on 17 August 2016 at the age of 91 years. His relatives from his hometown and the staff of the sanatorium gathered to attend the mass at his funeral at the Catholic Church. In this paper, I narrate his life story based on the interviews conducted in September 2015.

Acknowledgement

This study is supported by Grants-in-Aid for Scientific Research C (15K03164), and I appreciate the assistance provided by this resource. I wish to express my gratitude to Towao Takita and all the people in Matsuoka Hoyoen who accepted us as researchers.